◆レクチャー＆シンポジウム　中欧の現代美術◆

本年は、中欧に位置するポーランド、チェコ、スロヴァキア、ハンガリー、すなわちV（ヴィシェグラード）4国と日本との交流年です。本企画は、この交流年を記念して、V4国やその周辺諸国と日本における芸術を取り上げ、その特殊な歴史的経緯をふまえつつ、それぞれの国において芸術がどのように受け継がれ、また社会においてどのような役割を果たしてきたのかという点に注目するものです。

京都と東京との二都市にて開催しました。京都会場は二部構成を取り、第一部では､20世紀ポーランドを代表する芸術家の一人であるタデウシュ･カントルと、そのアーカイブ施設としてこの秋にリニューアルオープンしたクリコテカを中心としながら、彼の活動の意義を探りました。これは京都市立芸術大学芸術資源研究センターの活動の一環であり、また第四回タデウシュ・カントル研究会を兼ねました。第二部では、国際交流基金の学芸員招聘事業で来日中の、V4とその周辺国の学芸員たちにそれぞれ報告を依頼することで、この地域が戦後、どのような独自のジレンマや矛盾をかかえながら冷戦構造に対処したのかを各国の対比とともに探り、また現在それがどのような形で継承されているのかを検証しました。

東京では国際交流基金による学芸員招聘事業で来日中の中欧学芸員より各国の状況の報告を受けると共に、マリア・ポプシェンツカ教授や中欧美術の専門家を交え、総括としての全体討論を行いました。

かつてあまり情報が届かず、話題に上ることの少なかった旧社会主義諸国に近年注目が集まっています。本年は、V4と日本の交流年でもあることから、こうした国々の文化芸術と日本の関係に注目しながら明らかにしてゆくことは、これまでの西欧中心で進められてきた研究に異なる視点を与えることにもつながり、現代美術研究にとっても重要な意義深い催しとなりました。

本企画の実現にご協力いただきました皆様に深くお礼申し上げるとともに、今回の成果をふまえ、今後の相互交流や研究を一層進めてゆこうと考えています。

加須屋明子（京都市立芸術大学美術学部准教授）

国際交流基金（ジャパンファウンデーション）は、「V4＋日本」交流年を記念して、2014年12月1日から12月13日の13日間、ポーランド、チェコ、スロバキア、ハンガリーのV（ヴィシェグラード）4国、および、スロベニア、ルーマニアから、キュレーター6名を招へいしました。期間中は、日本の美術専門家によるレクチャーを受講するほか、東京都内、京都、金沢、直島を訪問し、美術館等の視察や各地の美術関係者との交流の機会を持ちつつ、日本の現代美術についての理解を深めていきました。
このプログラムの最後に、中欧の現代美術の最新情報をリポートするシンポジウムを開催しました。本シンポジウムでは、招へいキュレーター6名が、それぞれの国における現代美術の現状およびそれを取り巻く環境について発表しました。また、今回の訪日の成果及び今後取り組みたいと考える課題について報告いただくとともに、中欧美術の専門家を交え、総括としての全体討論を行いました。

＜京都＞
日時：12月6日（土）第一部 14:00～15:30／第二部 16:00～19:30
会場：京都芸術センター

第一部：レクチャー「タデウシュ・カントルーローカルとグローバルの間　Tadeusz Kantor - artist between local story and global fame」
主催：京都市立芸術大学
共催：京都芸術センター、ポーランド広報文化センター
協力：国際交流基金
講師：マリア・ポプシェンツカ（ワルシャワ大学人文学研究室教授）

第二部：シンポジウム（中欧諸国から招聘のキュレーター６名による各国現代美術についての報告、討論）
主催：京都市立芸術大学
共催：京都芸術センター、国際交流基金
協賛：ポーランド広報文化センター
パネリスト：セバスチャン・チホツキ（ポーランド：ワルシャワ近代美術館副館長）、アーロン・フェニヴェシ（ハンガリー：トラフォ・ギャラリー学芸員）、マリエ・クリメシ

ョヴァー（チェコ：カレル大学哲学部美術史学科准教授）、アンカ・ヴェロナ・ミフレッツ（ルーマニア：インディペンデント・キュレーター）、ゾラ・ルスィノヴァー（スロヴァキア：スロヴァキア美術アカデミー教授）、イゴル・スパニョル（スロヴェニア：リュブリャナ近代美術館メディアアート部門学芸員）

司会：加須屋明子

コメンテーター：井口壽乃（埼玉大学教養学部教授）、マリア・ポプシェンツカ

＜東京＞

日時：2014 年 12 月 12 日（金曜日）18 時～20 時 30 分

会場：国際交流基金 JFIC ホール[さくら]

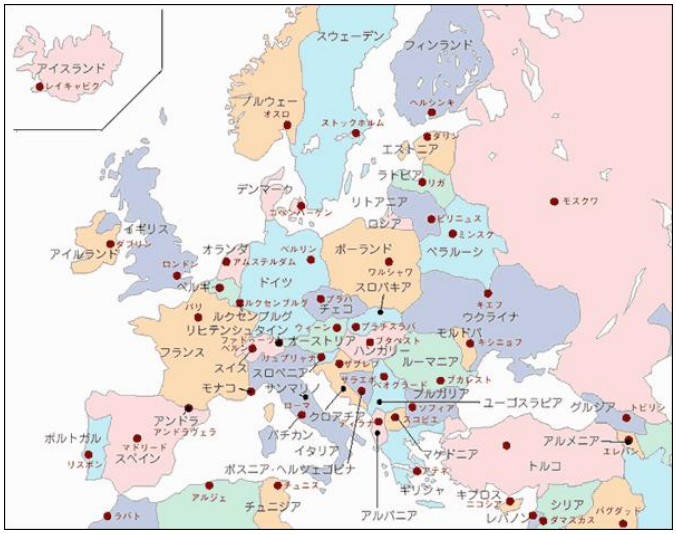
主催：国際交流基金　共催：京都市立芸術大学

協力：ポーランド広報文化センター

パネリスト：セバスチャン・チホツキ、アーロン・フェニヴェシ、マリエ・クリメショヴァー、アンカ・ヴェロナ・ミフレッツ、ゾラ・ルスィノヴァー、イゴル・スパニョル

コメンテーター：井口 壽乃、マリア・ポプシェンツカ、宮崎 淳史

司会：加須屋 明子



http://www2.ocn.ne.jp

経歴：

セバスチャン・チホツキ Sebastian Cichocki　（ポーランド：ワルシャワ近代美術館副館長）

1975 年生まれ、ワルシャワ在住。社会学者、キュレーター、作家。2005 年から 2008 年に

かけて、ビトムのクロニカ近代美術館館長。ネオ・コンセプチュアルな影響やランドアート、物についての理論や美術と関連するフィクション文学に関心を持つ。第52回ヴェネチア・ビエンナーレポーランド館のモニカ・ソスノフスカ「1：1」展や第54回ヴェネチア・ビエンナーレポーランド館のヤエル・バルタナ展、ブロドノ彫刻公園（2009年から継続）、「新しいポーランド美術、21世紀の国家のリアリズム」展（ワルシャワ近代美術館、2012）、「見えるまま。ポーランド現代美術」展（ワルシャワ近代美術館、2013）、「暗闇の中の虹」（SALT、イスタンブール、2014）など数多くの展覧会を手がける。またアートフォーラム、キャビネット、クリティカ・ポリティチュナ、FUKT、美術館、カメラ・オーストリアなどの雑誌にも寄稿。

アーロン・フェニヴェシ　Áron Fenyvesi　（ハンガリー：トラフォ・ギャラリー学芸員）
1983年生まれ、ブダペスト在住。キュレーター、アートライター。2011年よりトラフォ・ギャラリー（ブダペスト）キュレーター。国内外で多くの展覧会を手がけ、トラフォ・ギャラリー（ブダペスト）、ガレリア・プラン・B（ベルリン）、クンストフォーラム東ドイツギャラリー（レーゲンスブルク）、ザグレブ現代美術館、エレクトロプテレ・クラブ（クライオヴァ）などで地域や国際的な美術シーンを紹介してきた。2009年にはベルガモ近現代美術館（GAMeC）主催のロレンツォ・ボナルディ賞にノミネートされた。彼の文章はアートレビュー、光州ビエンナーレ2012の電子ジャーナルであるラウンドテーブルなどで発表された。

マリエ・クリメショヴァー　Marie Klimešová Ph.D.　（チェコ：カレル大学哲学部美術史学科准教授）
1952年生まれ、美術史家、キュレーター。AICAとチェコ美術史協会メンバー（2005年から2007年にかけて議長）。プラハ市ギャラリー（1987-1997）、プラハ国立美術館近現代コレクション（1997－2002、2000年9月から2011年1月まで館長）。2005年よりチャールズ大学（プラハ）美術史研究所准教授。近現代美術を扱う多くの展示を手がけ、特に以下の二つの重要な展示、「再生に注目：1957-1963チェコ美術」(1994)、「チェコ美術1945-1057」（2010、35歳以上のキュレーター向けの賞を受賞）を企画。最近はイジー・コラーシュ（スメツキギャラリー、プラハ）の個展などを手がけた。

アンカ・ヴェロナ・ミフレッツ Anca Verona Mihület（ルーマニア：インディペンデント・キュレーター）
シビウとブカレストで活動。2006年から2013年にかけて、リヴァニア・ダン、アンカ・ヴ

ェロナとともにシビウの国立美術館の現代美術ギャラリーの展覧会プログラムを企画。主なプロジェクトは、Adi Matei – *Moon Shuffle*; Napoleon Tiron – solo exhibition; *The Congress Dances. The Elephants Have Gone Crazy* – a collective project of Micha Payer & Martin Gabriel, Katharina Gruzei, Andrea Winkler; Matei Bejenaru – *Projects 2008 – 2010*; Mihai Olos – solo exhibition; Pavel Brăila – *Chişinău – Sibiu – Brăila.* など。2013 年には、第 55 回ヴェネチア・ビエンナーレでルーマニア館の片方で「*Reflection Center for Suspended Histories. An Attempt*」を企画。2014 年には、S-AIR 札幌と協力して、シビウでレジデンスを実施。2015 年には香港のオサゲ・ギャラリーでの展示に向けて「南東の南」展をパトリック・D. フローレス、アンカ・ヴェロナ・ミューレットとともに企画している。

ゾラ・ルスィノヴァー　Zora Rusinová　（スロヴァキア：スロヴァキア美術アカデミー教授）

スロヴァキア美術アカデミー教授、視覚文化 研究所長 コメンスキー大学（スロヴァキア）とパラツキー大学（チェコ）より博士号取得。 1992 年から 2007 年までスロヴァキア国立ギャラリーの彫刻および ニュー・メディアアート部門のキュレーションに携わる。1994 年から 2000 年まで 雑誌『ギャラリー――新しい芸術 Galéria – Noviny o umení 』の編集長を務める。 著書に Autoportrét v slovenskom výtrarnom umení 20. Storočia , VEDA, 2009 がある。

イゴル・スパニョル Igor Spanjol（スロヴェニア：リュブリャナ近代美術館メディアアート部門学芸員）

1972 年生まれ、リュブリャナ在住。リュブリャナ美術学部にて文化社会学と美術史を学ぶ。1999 年からリュブリャナ近代美術館学芸員として勤務。主なプロジェクトは、「スロヴェニア美術 1975-2005」リュブリャナ近代美術館（イゴル・ザベルと共同企画、2003-2005）、小ギャラリーでの展覧会シリーズ（2007-2009）、メテルコヴァ現代美術館の常設展示、回顧展、マルコ・ペリハン（2010）、マルコ・ポガチュニク(2012)、タデイ・ポガチャル(2014)など。

井口 壽乃（いぐち・としの）

埼玉大学教養学部教授 筑波大学大学院芸術学研究科博士課程修了。博士（芸術学）。ハンガリー科学アカデ ミー美術史研究所留学（ブタペスト、ハンガリー）。専攻は近・現代芸術論、デザイ ン史。 著書に『ハンガリー・アヴァンギャルド――MA とモホイ＝ナジ』（彩

流社、2000） 、 『世界写真史』（共著、美術出版社、2004)、『アヴァンギャルド宣言――中東欧のモ ダニズム』（編訳、三元社、2005)、『ポーランドの建築・デザイン史――工芸復興か らモダニズムへ』（共訳、彩流社、2006)、『視覚の実験室／モホイ＝ナジ』（監修、国 書刊行会、2011)、『中欧のモダンアート――ポーランド・チェコ・スロヴァキア・ハ ンガリー』（共著、彩流社、2013）など。

マリア・ポプシェンツカ　Maria Poprzęcka

1942 年ワルシャワ生まれ。1989 年より 2008 年までワルシャワ大学美術史研究所長。現在はワルシャワ大学人文学部教授。1998 年より美術史学会長。2009 年に『異質な絵画　目、まなざし、芸術　アルベルティからデュシャンまで』でグディニャ文学賞を受賞、2010 年には本書『珠玉のポーランド絵画』に対して文化・国家遺産省より賞が贈られた。専門は 19 世紀から 20 世紀の美術、現代美術、芸術理論並びに批評史、芸術学の方法論など。近年は主に現代の視覚美術について、とりわけその歴史的、価値論的側面に注目しつつ研究している。美術批評や各種エッセイも執筆し、美術の知識の普及に努める。

宮崎 淳史（みやざき・あつし）

東京外国語大学大学院博士後期課程満期退学。カレル大学哲学部留学（プラハ、 チェコ）。専攻はチェコ美術・文化論。 著書に『アヴァンギャルド宣言――中東欧のモダニズム』（共著、三元社、2005)。論 文に「両大戦間期チェコにおけるシュルレアリスムの受容――1920 年代後半のイ ンジフ・シュティルスキーによるグラフィック作品を中心とした技法、主題、絵画 空間の比較研究」『西スラヴ学論集』(2010 年、第 13 号)、「両大戦間期チェコのシュ ルレアリスム美術――シュティルスキーの作品におけるフレームの効果」『スラヴ 学論集』（2014 年、第 17 号）など。

加須屋 明子（かすや・あきこ）

京都市立芸術大学美術学部准教授 京都大学大学院哲学研究科博士後期課程美学美術史学専攻修了。ヤギェウォ大学 哲学研究所美学研究室留学（クラクフ、ポーランド)。1991 年から 2008 年まで国立 国際美術館学芸課勤務。専攻は近・現代美術、美学。 著書に『美術史をつくった女性たち――モダニズムの歩みのなかで』（共著、勁草 書房、2003)、『アヴァンギャルド宣言――中東欧のモダニズム』（共訳、三元社、 2005)、『ポーランド学を学ぶ人のために』（共著、世界思想社、2007)、『中欧のモ ダンアート――ポーランド・チェコ・スロヴァキア・ハンガリー』（共著、彩流社、 2013)、『ポーランドの前衛美術――生き延びるための「応用ファンタジー」』（創元 社、2014）など。